三徳開教110年

法音

今月のご法話

一生懸命

日蓮宗

法音寺

平成28年
7月号
No.561

三徳開教110年

一人が一人を

是非一人は

是非一人は、仏となれる人に導きましょう。
法華経には、一人を導く功徳は広大であるとあります。
その一人が、他の人を導く功徳が又大きいのです。
ついに一人を導く人が仏となります。
一人を導く人が極楽に住む人となります。
一人一人が極楽に住む人、仏になるのです。

御開山上人御遺訓『おりにふれて』

月刊・法音　平成二十八年七月号［561］

■目次■

【信仰の指針】初発心（しょほっしん）　2
【朝のこない夜はない】―一生懸命
何事も
一生懸命やりましょう　山首　鈴木正修　4
【特集】自説誓言　平成28年度御開山会　13
■法音春秋　45
■特別企画・聖の教え（七）　46
■是好良薬　今留在此―目連尊者のお話　56
■お釈迦さまと「獅子吼第一」のピンドーラ尊者のお話　58
■のりのね　広島県・岸本輝子　62
■のりのとも　西に東に　転法輪　64
■福祉のひろば　少子・高齢社会の中の日本の福祉　74
■福祉に生きる　児童養護施設・名古屋養育院の実践　76
■編集後記　84
■連載まんが・ひまわり・43　じいちゃんの命日　85
■法音寺の社会福祉・教育事業

表紙題字・信仰の指針　山首上人さま

表紙写真・アヤメ

善く菩薩の道を學して
世間の法に染まざること
蓮華の水に在るが如し

妙法蓮華經・從地涌出品第十五

蓮

信仰の指針

初発心（しょほっしん）

よけいなことを
思っていませんか

日教師

御開山会

朝のこない 夜はない

何事(なにごと)も
一生懸命(しょうけんめい)やりましょう

山首　鈴木正修

ウコンの花

一生懸命

―― 余分なことを考えずに一生懸命 ――

「わび茶」の大成者であり、豊臣秀吉に仕えた茶道三千家の始祖・千利休が、ある茶会に行った時のお話です。利休を招待した人が亭主となってお茶をたてましたが、亭主は緊張のあまり茶杓でお茶を取る際に震えて、こぼしこぼしやっていたそうです。出席者はみな、口を押さえて笑ったといいます。ところが、亭主が何とかお茶をたてて出すと利休はそれを飲み、「あっぱれな点前であった」と言ったそうです。

昔からお茶の世界では「慣れなければならないが、慣れてはならない」と言われています。慣れなければならないとは、熟練しなさいということです。慣れてはならないとは、惰性に陥ってはいけない、震えながらの、初心の心を忘れないようにせよ、ということです。

お茶の世界ではまた「生まれて初めて

点前に立ち向かった時の初心を忘れないように。初めてたてた一服も生涯でたった一度。二服目もたった一度。過ぎ去った時の流れが再び戻ってこない以上、どの瞬間もどの所作も生涯たった一度であることを忘れず、慎んで立ち向かいなさい」と言われます。つまり「一期一会」の精神です。

青山俊董という禅宗の尼僧さんが、あるお寺に出向かれた時のことです。ご法話の前に全員がご住職の唱導で「仏法聴聞の心得」を読まれたそうです。

「一つ、このたびのご縁は今生初めてのご縁と思うべし。一つ、このたびのご縁は私一人のためのご縁と思うべし。一つ、このたびのご縁は今生最後のご縁と思うべし」

法尼はこれを聞き〝すばらしい〟とすぐにメモをされたそうです。

「今生初めてのご縁」とは、何回も聞いている話であっても、いつも初めて聞く話だと思って聞かなければならないということです。

沢木興道という禅宗の高僧も「大事なことは耳鳴りがするほど聞きなさい」と

言っています。どんなお話も初めて聞くつもりで聞くと、そこにはその時々の悟りがあるものです。

また「私一人のご縁」とは、私のために話してくださっていると思わなければいけないということです。

そして「今生最後のご縁」とは、また聞けると思ってはいけない。次はないという気で聞きなさいということです。

ご法話をするにあたっても、慣れてくるとよくありません。また、上手くやろう、ほめてもらおうと思うと雑念が入ってよくありません。「今生一回」と思って一生懸命にすることが大切です。

ある信教師さんが報恩講習会で話をされた時、「非常に緊張した」と言われました。

「家族や知り合いも聞きに来ていたので、時計も見られないくらい緊張したけれども、一生懸命話をしていたらちょうどその時間に終えられてホッとした」と言われました。私はその方に「何より一生懸命やるということが大事です。すばらしかったですね」と申し上げました。

鎌倉の円覚寺の管長・横田南嶺上人は

生涯独身を貫き、現在六十歳くらいになられます。若くして管長になられ、本を何冊も書いておられますし、すばらしいお話をされる方です。その横田上人が「母はありがたいです。どこに行っても話を聞いてくださった方から『管長猊下、ありがたいご法話でした』とほめてもらえますが、母には必ず『またいい加減なことを言ってからに』と言われてしまいます。でもこれがいいのです。みながみなほめてくださると慢心してしまいます。しかし母は、茶化すように言うのです。それが実はありがたいのです」とおっしゃいました。お母さまが横田上人を初心にもどしてくださるのかもしれません。

岐阜支院の前主管・丹羽上人から聞いたお話です。昔、鈴木慈学上人はお元気な頃、講日のたびに岐阜に赴かれていました。現在は月に一度夜の講日がありますが、以前はお昼だけでした。ある時、一人の信者さんが〝たまには夜の法座もやっていただけませんか〟と言われるので、丹羽上人が慈学上人に相談をしたところ「昼に来て、そのまま夜までいてやればいいから」と夜の法座もされるようになりました。しかし、夜はあまり人が

集まらなくてだんだん減っていき、とうとう、一人になってしまいました。そこで丹羽上人が慈学上人に「今日は信者さんはお一人だけですが、どうされますか」と聞くと「やるよ」と言われ、お勤めの後一対一でご法話をされたそうです。講日の後、丹羽上人が「次回もし一人も来られなかったらどうしましょうか」と聞かれると、「柱に向かってご法話をすればいい」と言われたそうです。慈学上人には、うまく話そうとか、人から良く思われたいというような気持ちが一切無く、ただ法華経を正しく、一生懸命に説くという心のみだったのです。

慈学上人の言われたことを実際にやられた方がいます。中国の竺道生というお坊さんです。法華経・法師品には「若し説法の人、獨空閑の處に在って、寂寞として人の聲なからんに、此の經典を讀誦せば、我爾の時に爲に、清淨光明の身を現ぜん」とあります。〝説法をする人が、誰も何もないところで法を説いていたら、私が清浄光明の身をそこに現す〟とお釈迦さまはおっしゃるのです。また「若し人空閑にあらば、我天・龍王、夜叉・鬼

神等を遣わして、為に聽法の衆となさん」ともあります。〝誰もいないところで話をしていても、必ず聴いている人がいる。またそのようにする〟とお釈迦さまはおっしゃるのです。竺道生はこれを証明したのです。

道正は、四世紀の半ばから五世紀の初めに活躍した人です。この人は幼少時に出家して、十五歳の時すでに法座に昇っていたといいます。四十歳くらいの時、妙法蓮華経を翻訳した鳩摩羅什三蔵が首都・長安に入りました。それを聞いてすぐに駆けつけ、弟子入りしました。するとたちまち羅什門下四傑の一人と言われるようになったのです。

鳩摩羅什は法華経を翻訳しましたが、道生はその注釈書を書きました。最古の注釈書で「法華経義疏」と呼ばれています。また五時八教につながる「教相判釈」によって、お釈迦さま一代の教えを「善浄法輪」「方便法輪」「真実法輪」「無余法輪」とに分けて説明しています。

「善浄法輪」は在家信者のために説かれた教え。「方便法輪」は声聞・縁覚・菩薩のために説かれた教え。「真実法輪」は法華経。「無余法輪」は涅槃経です。

涅槃経に関しては前半部分の「大般泥洹経」だけが道生の時代に伝わっていたのですが、実はその中に〝正法を誹謗するような悪い人（闡提）は絶対に成仏できない〟とありました。ですから当時の人は〝正法の悪口を言うような人は絶対に成仏できない〟と信じていました。それに対して道生は「それは仏さまの真意ではない。仏さまは一闡提までもすべてを成仏させるという考えの方だからそれは違う。この涅槃経には続きがあるはずだ」と反論しました。そのため追放され、蘇州の山奥にある虎丘寺に隠棲を余儀なくされました。しかしひるむことなく「我が所説は、もし経義に反すれば現身において癘疾を表さん。もし実相と違背せずば、願わくば壽終の時、獅子の座に昇らん」と誓言し、以来毎日、山川草木に向かって法華経と涅槃経を説き、また闡提成仏の義を説くと、ある時、たくさんの石が首肯したと言います。喜んで飛び跳ねる石もあったそうです。仏さまが「道生の言うとおり、間違いない」と石を化身として教えを示されたのです。法師品に書かれていることが起こったのです。

そして何年かのち、涅槃経の後半部分が中国に伝わってきました。道生の言う通り「すべての人が成仏できる。一闡提も成仏できる」と書いてありました。すると、それまで道生の説に反していた人たちがその先見の明に感服したと言われています。

道生は晩年故郷の廬山に帰り、生涯を送りました。最後は誓った通り、廬山で法座に昇って、説法が終わると同時に眠るように入滅したということです。

今、虎丘寺があった場所には虎丘公園があります。そこには、道生が法を説いた時に動いたという石「点頭石」が祀られています。点頭とは〝うなずく〟という意味です。道生の法を聞き、うなずいた石ということです。

いついかなる時も、真実を抱いて、一生懸命にやることが尊いということです。

「仏」に「経」そして「仏教」。これらは一体誰のものなのか。論議は分かれようが、じっくり考えてみたいと、現在連載中の『聖の教え』編纂にあたり思い至った▲仏教寺院？僧侶？仏教学者？否々〝お葬式屋さんのものでしょう〟なんて返事を返されるかもしれない。それほどに昨今は、仏も経も仏教も人々の周りから遠のいているように思えるのだ▲そもそも仏教の真の目的とするところは、世の中を良くするため、人々を仏の境界＝本当の幸せに導くためである筈のものである。そして対象としているのはこの世界、森羅万象のすべて、わけても「四衆」いわゆる「比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷」つまり、この世に住するすべての人である。すべての人の本当の幸せを願い、この娑婆世界を寂光の浄土とするために釈尊は真理を開顕されたのである。決して寺院経営のためでも、教団繁栄のためでも、学者さんの名誉のためでも、葬祭関連業者のお金もうけのためでもない。今生きている人間のために釈尊は真理を求め、苦難に耐え、仏に成るための教え＝仏教を遺して下さったのである▲然るに現代、仏教に関与する僧・学者・業者等々は、仏も経も、そして仏教そのものすべてを自分の

●法音春秋●

都合のいいように解釈して真の仏陀の覚りを人々に開示していないように思えてならない。更に有体に言うなら、自分の都合のいい部分だけは知っている（知ったふりをしている？）けれど、それではまさに「群盲象を評す」で、真実には程遠い。それでも自分の知り得た仏教があるとすれば少しでも縁有る人々に開示し、教え導く責任があると思うのだが出し惜しみなのか全く期待できない。ために大多数の人々は仏教を全く知らないか、とんでもない誤解をしたままでいる▲これではやはりいけないだろう。〝そんなことは末法悪世だから仕方なかろう〟という声が聞こえてきそうだが、やはりいけない▲当山前山首・日達上人は常々「法音寺は正当な仏教教団である」と胸を張っておっしゃっていた。では正統な仏教教団とは？言うまでもない。仏陀のみ教えを娑婆世界のすべての人に正しく伝えている教団である。釈尊出世の本懐・妙法蓮華経と、その経を戴して真理を説示された宗祖大聖人の御書を現代に合わせて四衆に開示し、悟入せしめているとの自負心が「正統な仏教教団」と言わしめているのである。さすれば今その意を戴して進むべきは『法音』と、我もまた自負するものである。

特別企画

聖の教え（七）

如来の事 ＝ 顕本（仏陀論）

〝ほとけとは慈悲堪忍の強くして
一切衆を救うひとなり〟

御開山上人御詠

◇今佛世尊、大法を說き、大法の雨を雨らし、大法の螺を吹き、大法の鼓を擊ち、大法の義を演べんと欲するならん。

妙法蓮華經・序品　四七頁

◇我本誓願を立てて、一切の衆をして、我が如く等しくして異ることなからしめんと欲しき。我が昔の所願の如き、今者已に滿足しぬ、一切衆生を化して、皆佛道に入らしむ。若し我衆生に遇えば、盡く教うるに佛道を以てす。

妙法蓮華經・方便品　七二頁

◇我はこれ衆生の父なり。其の苦難を拔き無量無邊の佛智慧の樂を與え、其れをして遊戯せしむべし。

妙法蓮華經・譬喩品　九八頁

◇我は爲れ法王、法に於て自在なり、衆生を安穩ならしめんが故に、世に現ず。

妙法蓮華經・譬喩品　一一〇頁

◇我法雨を雨らして、世間に充滿す。一味の法を、力に隨って修行すること、彼の叢林、藥草・諸樹の、其の大小に隨って、漸く增茂して好きが如し。

妙法蓮華經・藥草喩品　一四一頁

◇佛は世間の眼と爲って、久遠に時に乃し出でたまえり。諸の衆生を哀愍したもう故に世間に現じ、超出して正覺を成じたまえり。我等甚だ欣慶す。及び餘の一切の衆も、喜んで未曾有なりと歎ず。我等が諸の宮殿、光を蒙るが故に嚴飾せり、今以て世尊に奉る、唯哀みを垂れて納受したまえ。願わくは此の功德を以て、普く一切に及ぼし、我等と衆生と、皆共に佛道を成ぜん。

妙法蓮華經・化城喩品　一六八頁

◇如來の演ぶる所の經典は、皆衆生を度脫せんが爲なり。或は己身を說き、或は他身を說き、或は己身を示し、或は他身を示し、或は己事を示し、或は他事を示す。諸の言說する所は皆實にして虛しからず。

妙法蓮華經・如來壽量品　二七四頁

◇我佛を得てより來、經たる所の諸の劫數、無量百千萬、億載阿僧祇なり。常に法を說いて、無數億の衆生を敎化して、佛道に入らしむ。爾しより來無量劫なり。衆生を度せんが爲の故に、方便して涅槃を現ず。而も實には滅度せず、常に此に住して法を說く。

妙法蓮華經・如來壽量品　二七九頁

◇如來は大慈悲あって諸の慳悋なく、亦畏るる所なくして、能く衆生に佛の智慧・如來の智慧・自然の智慧を與う。如來は是れ一切衆生の大施主なり。汝等亦隨って如來の法を學すべし。慳悋を生ずることなかれ。未來世に於て、若し善男子・善女人あって如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に此の法華經を演說して、聞知することを得せしむべし。其の人をして佛慧を得せしめんが爲の故なり。

妙法蓮華經・囑累品　三三二頁

◇我が師釋迦如來は一代聖敎乃至八萬法藏の說者なり。此の娑婆無佛の世に最先に出でさせ給いて、一切衆生の眼目を開き給う御佛なり。東西十方の諸佛・菩薩も、皆此の佛の敎えなるべし。

善無畏三藏鈔　六五五頁

◇釋迦佛と法華經の文字とはかわれども心は一つなり。されば法華經の文字を拜見せさせ給う

は、生身の釈迦如來に値い進らせたりと覺しめすべし。　四條金吾殿御返事　八九七頁

◇佛の入滅は既に二千餘年を經たり。然りと雖も法華經を信ずる者の許に佛の音聲を留めて、時時刻刻念念に我が死せざる由を聞かしむるなり。　守護國家論　二五〇頁

◇此の經の文字は皆悉く生身妙覺の御佛なり。然れども我等は肉眼なれば文字と見るなり。例せば餓鬼は恆河を火と見る、人は水と見る、天人は甘露と見る。水は一なれども果報に隨いて別別なり。此の經の文字は盲目の者は之を見ず。肉眼の者は文字と見る、二乘は虛空と見る、菩薩は無量の法門と見る、佛は一一の文字を金色の釋尊と御覽あるべきなり。

曾谷入道殿御返事　一一三五頁

◇佛の御意現われて法華の文字となれり。文字變じて又佛の御意となる。されば法華經を讀ませ給わむ人は、文字と思食す事なかれ、卽ち佛の御意なり。　木繪二像開眼の事　五四六頁

◇教主釋尊は天の一月、諸佛菩薩等は萬水に浮べる影なり。

日眼女造立釋迦佛供養の事　一七五一頁

◇此の経の文字は卽ち釋迦如來の御魂なり。一一の文字は佛の御魂なれば、此の経を行ぜん人をば、釋迦如來我が御眼の如く守り給うべし。人の身に影の添えるが如く添わせ給うらん。

祈禱鈔　九一三頁

◆安立大法尼

釈尊の説かれた経は、権教と実教とに区別することができます。権教というのは、仮の方便として説かれた教えであり、実教は、釈尊出世の本懐であって成仏無疑の経、究竟身実の教えであります。釈尊がご成道の御時より四十余年間に説かれたところの華厳経、阿含経、方等経、般若経は即ち権教であって、また権大乗とも白法とも方便経とも申しております。これは、釈尊が法華開経の無量義経に於て、「四十余年、未だ真実を顕わさず」と喝破しておられるのをみても明白であります。当時の衆生の知見があまりに幼稚であったために、これに直接実大乗の教えを説いても到底それを咀嚼するだけの力がありません。かえって驚疑して逃れ去る恐れがあったから、真実の経を説くに先立ってまず彼等の知見を開発し、未熟な機根を調える必要があったのです。たとえば、幼児を教育するためにおとぎばなしを聞かせたり、おもちゃを与えたりするようなものです。しかし、おとぎばなしやおもちゃは教育の最終目的ではありません。釈尊は四十余年間の準備教育によって衆生の機根がようやく熟したのを見らるるや、「今

正に時なり」と、御年七十二歳の時より八か年間にわたって真実門を開顕説示せられました。即ちそれが「妙法蓮華経」であります。　これは経文によってきわめて明瞭なことであります。法華経に曰く、

「未だ曾て説かざる所以は、説時未だ至らざるが故なり。今正しく是れ其の時なり。決定して大乗を説く」（方便品）。また、

「我が所説の諸経、而も此の経の中に於て法華最も第一なり。――我が所説の経典、無量千萬億にして、已に（過去）説き、今（現在）説き、當に（未來）説かん。而も其の中に於て此の法華経最も爲れ難信難解なり。――此の経は是れ諸佛の祕要の藏なり」（法師品）と。

即ち法華経は、釈尊が四十余年の間、内に秘蔵して開示されなかったものであります。過去・現在・未来を通じ、釈尊御一代の経典中最上位のもので、一切衆生が成仏するのは、この妙法蓮華経に依るより他に道はないのであります。したがって諸仏の説法の目的も、ただこの妙法を説くことであって、それ以外には何もないのであります。経に曰く、

「我が所説の法を聞くこと、乃至一偈に於てもせば、皆成佛せんこと疑なし。十方佛土の中には唯一乘の法のみあり、二なく、亦三なし」（方便品）。

これを以って見ても、実大乗経というのは法華経を指していることは疑う余地がありません。

始祖・御法話集　三五頁

◆宗玄大徳

出世の本懐

思い起こせば今より三千年のその昔、釈尊はインドの伽毗羅国、浄飯大王の王子と生まれ給い、年紀十七の頃、深く人生に疑問を懐きつつ日夜我等衆生が諸々の苦悩を受けるを憐み給い、この煩悩を救わんとの大願を発し給いて、御年十九、潜かに王宮を脱して雪山に分け入らせられ、御身に着けられたりし七宝の剣を解き去り、頭に頂き給いし宝冠を脱ぎ捨て、髻の名珠も把りて父王に献じ、身に纏われし瓔珞を解いて母公に献じ給い、御衣、玉帯すら解かせられて木の葉の衣を身に纏い給い、山海の珍味に代えるに木の実を食とし給い、大法を得んがためにこそ樹根、岩頭を伝って水を汲み、薪を拾い、菜をも摘まれて、お肌も鹿子まだらに血に染み給いしことども、その難行・苦行の有様は到底我々の想像の限りではありません。この難行もひとえに末法の我等のためでありました。

かくして修行し給うこと十二年にして、雪山を出でさせられたのでありました。

まず波羅那国に至られて初めて教化をせられました。これが釈尊説法の始めであったのであります。

かくしてご説法をせらるるようになってよりは、衆生の機根に従ってあるいは方便をもって教え、あるいは譬喩をもって、浅識の者のためには解し易く浅く説き、深智の者には深くお説きくださったのであります。その最初は権大乗の華厳経であって三七日の間、次に小乗の阿含

経を十二年、権大乗の方等経を十六年、同じく権大乗の般若経を十四年、合わせて四十余年。これを過ぎて初めて機根の熟したことを知られ、無量義経にて「四十余年未だ真実を顕さず」と権門を打ち破られて、釈尊出世の本懐、一切衆生の必ず成仏すべき真実経たる法華経を八か年にわたりてお説きくださったのであります。涅槃に入らるるに先立ち、一切経の補足として一日一夜お説きくだされしが涅槃経なることは、仏教徒の誠によく知るところであります。

村上先生御法話集（一）　一二九頁

◆御開山上人

如来ということ

如来とは仏様のことであります。

如来の如とは、「常」ということ、来は「来る」ということであります。つまり「仏様はいつでもわれわれを見守っていて下さる」ということであります。

誠心をもって仏を信じ、仏の教えに従って修行をする者には、仏は常に来ってお守り下さるのであります。いいかえれば、教主釈尊のお力が、いつでもわれわれの心の中に働いて来るのであります。仏様がおられないと思うのは、われわれの誠心と信心が足りないからであります。仏様は永遠に存在して、いつでも力となって、われわれの心の中に働いていて下さるのであります。われわれは、仏様がわれわれの心の中に働いて下さることを信ずると同時に、親子・兄

弟等の家族は勿論、友人にも知人にもと、力のおよぶ限りの人々を見守り、安楽を与えていく者となるよう、修行を積んでいかなければなりません。

私達もまた、「我と等しくして異なること無からしめん」とのお言葉の如く、親仏の代理者としての、仏の働きをしなければならないと思うのであります。

話の泉　一四頁

如我等無異　〝我が如く等しくして　異なること無からしめんと欲す〟

これは仏さまの金言であります。仏さまは、世の中には良い人々がたくさんいるけれども、中には馬鹿も悪人もある。しかし〝すべての者を等しく、私と同じ仏にしてあげよう。それが私の理想である〟と仰せられているのであります。

世界中見渡しても、大昔から聖人といわれる人の中にも、このようなありがたい、尊いことを申された方はありません。実に広大無辺の大慈悲に充ちた金言であると、感涙にむせぶものであります。私も皆さんも、この大慈悲に浴することが出来る人間となったのであります。皆さんは決して自分を軽んじてはなりません。未だ仏に成る道を知らない人や、理解出来ない人には、親切に教えて下さい。よく怒ったりする者でも、愚かな者でも、皆仏に成る種子を持った人達ばかりです。その種子（仏性）を伸ばしてゆき、共々に成仏への道を歩ませて下さい。

極楽と仏　二四頁

◆日達上人

仏の教化＝他事　何かいいこと、嬉しいことがあると仏さまのご利益と思いますが、苦しいこと、悪いことはどうしてもそう思えないものです。しかし病気になることも、苦しいことに出会うことも、みな仏さまが一つのことを教えるために与えてくださったご利益なのです。苦しみ・悩みを与えることによってその人に気づかせることを「他事を示す」というのであります。

大白牛車・5　六頁

如我等無異　「我が如く等しくして異なること無からしめん」と、仏さまは私のようないたらない者にまで、温かいお言葉をくださいました。一億円くださるというより、もっと価値のあることです。こんなうれしいことはありません。

大白牛車・7　四頁

顕本　久遠の本地を開く。

己身・他身・己事・他事　法華経の本仏（久遠実成の本師・釈迦牟尼世尊）は、時間的には三世を貫き、空間的には、十方世界に満ちた実在の身を持って自由に、欲する所へその身を現し、功徳を垂れ、衆生を救うために方便を以って各所に種々の身を示し、法を説き、或いは自身を示して自らの本領を説き、時と所に応じて仏身とその国土を具体的に表現することを意味している。随って、久遠の本仏は一仏であってしかも多仏を兼ねたものであることを立証している。

八萬法藏　衆生の煩悩は八万四千もあるとされ、その一々を対治するにふさわしい法門を説かれた。これを八万四千の法門といい、八万聖教ともいう。

甘露　天人の飲む美酒、不死の薬。仏の慈悲に譬う。

是好良薬　今留在此

是の好き良薬を
今留めて此に置く

御開山上人著・続現代生活の指針

目連尊者のお話

昔、お釈迦さまのお弟子に、目連尊者という方がおられました。目連尊者は長い間の修行で、阿羅漢という程度になられました。阿羅漢という程度は「殺賊」と申して、心の中の迷い、即ち、貪り心や、気に入らぬといって腹立つことや、思うようにならぬといって愚痴をいう迷い心をなくすることですが、目連尊者は、こういう迷い心がなくなった境遇に達せられ、神通力をえられたのであります。

目連尊者のお母さんを青提女と申します。その時お母さんが亡くなっておられたので、お母さんはいかなる境遇におられるかと、天眼通でご覧になりました。お母さんは思いもよらぬ、餓鬼道というところで、食もなく痩せ衰えた姿で、画に書かれている餓鬼そのままの姿でありました。

「餓鬼道と申す所に我が母あり。飲む事なし食うことなし。皮は金鳥を毟れるが如く、骨はまろき石を竝べたるが如し。頭は麹の如く、頸は絲の如し、腹は大海の如し。口をはり手を合せて物を乞える形は、餓えたる蛭の人の香を嗅げるが如し」（盂蘭盆御書）という、まことに見るも気の毒のような有様でありました。

目連尊者は、ただちに神通力で以って、一椀のご飯を贈られたのです。お母さんは、喜んでその一椀のご飯を召し上がろうとせられるや、ご飯の上から炎が上がり、その炎のために母はご飯も食べられません。目連尊者は、神通力を以って大雨を降らせられたということですが、その雨は火に注いだ油の如く燃え上がって、お母さんは火達磨の如く、七転八

倒の苦しみでありました。目連尊者ではいかんとも手の施す術はありませんでした。

目連尊者は、お釈迦さまの前へかけつけて、救いを求められたのです。

お釈迦さまは、

「それは可哀そうだ。しかし汝には、亡き父母を地獄の苦しみより救うことは教えてなかったのだ。七月十五日には、人を救い助ける聖僧の集まりがある。汝の真心をもって、聖僧に食物の供養をなさい」

と申されました。

目連尊者は大いに喜び、七月十五日に百味の飲食を以って聖僧の供養をいたしましたところ、目連尊者のお母さんは、一劫という長い間の餓鬼道に苦しまなければならぬ罪が除滅せられたということです。

目連尊者は大いに喜んで、お釈迦さまにお礼を申されました。

お釈迦さまは、

「お前の母は、世間普通より見れば良い人であったろうが、世間普通の良い人といわれるだけでは仏には成れないのだ。良いということは我が子、お前を愛されたことで、しかもお前を愛することによって罪業を積まれたのである。人と生まれては、何を目的として暮らして行くかという、仏としての道を知らない者は、善いことだと思っても大きな善いことではない。善いことだと思ったことが却って悪い種となることも多いのである。仏の道を学ばぬ人は、せっかくの働きがみな悪事となってしまって、ついに九匹の牛の毛の数にもまさるほど、罪業を重ねてしまうものである」

とお話しになられました。

汝可取服　勿憂不差

汝取りて服すべし
差えじと憂うること勿れと

お釈迦さまと「獅子吼第二」のピンドーラ尊者のお話

ピンドーラ（賓頭盧尊者）は、コーサンビー国のウデーナ王に仕えた大臣の子どもとして誕生しました。幼いころから頭が良く、上品な容姿で、人々に愛されていました。修行を始めたころは大食漢で、大きな托鉢の鉢を抱えて行脚していましたが、お釈迦さまの教えをよく学び、忠告に従って暴飲暴食の悪習を克服しました。

当時、ウデーナ王は権勢を誇り、国をよく治めていましたが、気が短く横暴なところがありました。ある時、王は森に狩りに行きましたが、大した獲物もなくイライラしていました。見ると、大きな樹の下で、一人端然と座り、瞑想にふけっている修行者がいました。ウデーナ王は大勢の家来を連れ、猛々しく修行者に近づきましたが少しも恐れることなく、瞑想を続けていました。そこでウデーナ王は「修行者よ、我がために説法を

せよ。さもなくば斬り殺す」と言い放ちました。それでも修行者はピクリともしません。カッとなったウデーナ王が刀を抜いて切りかかろうとした時、王の后が諌めました。「弟子の修行者でさえあのように静かに瞑想を続けておられます。まして、師であるお釈迦さまはどのように優れたお方でありましょうか。計り知れぬことでございます」と。

ある時、ウデーナ王は七日間も酒を飲み続け、酔って多くの侍女を連れて森に来ました。そして、森の中でグーグーと寝てしまいました。侍女たちは、王の眠っている間あちらこちらとさまよい歩き、木陰に端坐している修行者・ピンドーラを見つけました。侍女たちはその上品で清々しい姿に引き込

まれ、何か説法をして欲しいと頼みました。

一方、目を覚ましたウデーナ王は誰もいないのを不思議に思い、森の奥に入って行くと、侍女たちはうっとりした表情でピンドーラの話に聞き入っていました。王は激怒し、刀を抜いて

ピンドーラの頭に突きつけましたが、岩のように動きません。ますます怒り狂った王はアリ塚を壊し、無数の赤蟻を頭からかけました。すばやく身を起こしたピンドーラは大音声で王に、人としての心を説きました。その獅子吼に王は畏伏し、初めて自分の狂暴性を恥じ、罪を詫びるとともに、お釈迦さまに教えを説いていただきたいと願い出ました。それが、お釈迦さまの教えがこの国に広まるきっかけとなったのです。

お釈迦さまはそのピンドーラを「教えを説く者たちの中にあって、雄たけびで百獣を恐れさせる獅子のように外道を排撃し、正法を説くピンドーラは『獅子吼第一』である」とおほめになりました。

また、ピンドーラは神通力という不思議な力も具えていました。ある時、町で長者が、高価な梅檀の木で作った鉢を長い竹竿の先の籠に入れ「神通力を持っている者は、空中に浮かんでこの鉢を取ってみよ」と触れ回っていました。自信のある人たちが何人も飛び上がって鉢を取ろうとしましたが、取れませんでした。ピンドーラは、大きな石の上で瞑想していましたが、

その騒ぎにムクムクと好奇心が起こり、空高く飛び上がって鉢を手に取り上空を三周しました。これを見ていた人々は「ピンドーラ尊者が神通力であの鉢をお取りになったぞ」と、口々に叫びました。長者もその神通力の見事さに感嘆して、多くの品を供養しましたが、これを聞いた

お釈迦さまはピンドーラを呼び、「人々の前で神通力をひけらかしてはいけない。この鉢は削って粉にし、眼薬に使いなさい。ピンドーラよ、私はお前に、すべての人を救うように教えてきたはずです。今後、私に付いてくることを禁じます。これからは南インドの山中に入り、そこに住んで、世の人々のために教えを説きなさい」と厳しく申し渡されました。

ピンドーラはこうして、山に籠ってお釈迦さまの亡き後、長い間

この世に生き続け、悩む人々のために教えを説き続けました。

（J・T）

福祉のひろば

少子・高齢社会の中の日本の福祉

海外の紛争地域にある収容所で暮らす子どもたちの様子がテレビで報道されることがあります。幼児期から大人の愛情ある眼差しやふれあいを充分に受けてこなかった子どもたちは、言葉かけにも反応せず、また目線を合わせることすらできないそうです。つまり、人間にはやさしい眼差し、やさしい言葉、やさしいふれあいが必要なのです。そうして初めて「人として認められている」と意識することができ、それにより喜怒哀楽の感情が獲得できるのだそうです。

これまで普通に人生を過ごしてきた高齢者が認知症になる場合も、同じことが言えるように思います。認知症になった途端に、周囲の人から無視されたり、厳しく叱責されたり、納得しないまま無理矢理手を引っ張られてトイレに連れていかれるような扱いを受けると、自尊心をとても傷つけられるのです。「人として扱われない」ことによって、時に自己防衛本能が働き、「暴言・暴力」などの認知症特有の症状が現れることがあります。また、現実逃避をして内的世界に閉じこもってしまい、他者と意思疎通が困難な状況に陥ることもあります。

家族が認知症になった時、私たちはどのように向き合えばよいのでしょう。数年前、『NHKクローズアップ現代』という番組で「ユマニチュード」と呼ばれる新しい認知症ケア技術が紹介されました。

フランスで生まれたこの新しい技術は「見る」、

「話す」、「触れる」、「立つ」を4つの柱とし、150以上の技法で構成されています。ここでは、すぐに実践できることを一部紹介します。

（1）「見る」

認知症の方は、視野が狭くなっている方々も多いのです。その場合、正面からゆっくり近づいて、相手の方と視線を合わせてから話しかけることが大切です。

（2）「話す」

認知症の方は物事を忘れやすい特徴があります。そのため、ケアを行うに際し、その内容を積極的に、まるで実況中継するかのように話しかけることが効果的であり、そうすることで相手の方にも安心を与えます。

（3）「触れる」

認知症の方には、手のひらで本人の背中に触れたり、手をやさしく包み込むようにしましょう。手のひらを使うのは相手に親密さを感じさせ、安心感を与えるので効果的です。逆に手首をつかむと、どこかに連行される感覚を与え、不安にさせてしまいます。

（4）「立つ」

自らの足で立つことにより、「二足歩行」である人間としての自覚を促し、生活する意欲を引き出します。

これらを組み合わせることで、寝たきりで意思疎通が困難だった認知症高齢者も意思疎通ができるようになり、歩行できる状態にまで回復したとか、介護を強く拒んでいた方が笑顔で介護を受けるようになったという事例も報告されています。

認知症高齢者の方が人生最期の日まで人間らしくあり続けることができるようにするためには、相手の気持ちを考え、心掛けて接することが大切です。周囲の人がその方との「絆」や「関係性」を大切にしようとすることで、「自分は人間として大切にされている」と感じさせ、日々の生活や環境に「安心」を与えることができるのです。

（K・T）

『日本福祉大学を創った鈴木修学上人の物語・日本の福祉を築いたお坊さん』を読んで…

福祉に生きる

修学先生が築き上げた福祉の新たな未来を切り開くために

社会福祉法人 昭徳会

児童養護施設 名古屋養育院の実践

「福祉」という言葉で「しあわせの連鎖」を永遠に…

名古屋養育院 保育士 諸岡 ひとみ

人は誰もが、生きていく中で一度は〝自分は何のために生まれてきたのだろう〟という疑問を抱くことがあると思います。しかし、そう思ってはいてもなかなか形には出せず、これまでの行いを見つめ直すことをしません。そのため、鈴木修学先生が気づかれたような〝他者への幸せの種をまくことが自身の幸せにつながる〟と考えることは容易ではありません。しかし修学先生は、その道のりは険しいものでしたが、さまざまな難関を乗り越え、すべての人を自分と同じ境遇の幸せにする、と決意されました。

その決意を実際に行うため、まず修学先生は当時、伝染し、不治の病と恐れられてきたハンセン病患者の看病を行いました。当時はハンセン病についての世間の理解

は薄く、身内であっても隔離し、縁を切って生活しなくてはならない時代でした。しかし修学先生は、そんな世間の話を気にすることなく、ハンセン病は非常に伝染力が弱いものであること、看病すれば治癒につながるということを見極め、必死で訴えてきました。また誰にも譲らなかったことは、ハンセン病患者も皆同じ幸福になるべき人間であるという信念です。その言葉を聞いたとき、どれだけの患者が生きる希望を持ち得たか計り知れません。

私も、以前ハンセン病を患った方の症例画像を見たことがありますが、現在も記憶に残っております。まして当時はどれほどの衝撃を受けたことかと推察します。その経験から、とても中途半端な気持ちや同情の気持ち、優しさだけでは行えるものではなく、修学先生がどれほど勇気や信念を持って挑んだのか、心の奥に熱い思いが伝わってくるようでした。

また、修学先生は世間の子どもたちに対し、自分の子どもと同じように接した方でした。やがて修学先生は、罪を犯した少年の更生、虐待を受けた子どもたちの心を癒す手助けをするため、一つ屋根の下で子どもたちと衣食住を共にする道を選びました。罪を犯してきた子どもたちは、背景などを考慮・理解されないまま罪名だけの判断・偏見により、周囲から孤立し、自らの罪に対する心と葛藤していかなくてはなりません。しかし修学先生は恐れず、そんな子どもたちとつながりを持ち、働きかけていきました。すると、周囲の人からも目に見えてわかるような変化が現れました。大人を信用できず、世の中へ不信感を抱いていた子どもたちですが、修学先生を信じ、ついていったのは、修学先生が決して体罰を与えず、苦労を共にし、ほめること・認めることを忘れなかったからであると思います。

ほめるという行為は簡単であたりまえのことに思えますが、実は子ども一人ひとりの一日の生活を温かく、しっかりと見守る姿勢がなくてはできない行為であり、子どもたちにとっては、自分を見てくれているという思いが安心感に変わるという、奥が深いものです。

修学先生は子どもたち全員に対し、分け隔てなく、無償の愛を注ぎました。そして、観察することも忘れませんでした。外の世界が恋しくなってきたと思われる子どもの行動をいち早く察知し、個人の時間を設け、一緒に外へ出かけて段階に応じた気持ちを受け止めていくなど、日々を大切に、深く関係を築いていきました。

これらの、常に他者のために自分ができることを精一杯尽くしてきた修学先生の善ある行いが、現在に至って

私たちにつながり、「福祉」という言葉でまた人を幸福にしているのだと感じました。これが「しあわせの連鎖」と言えると思います。初めに修学先生が誓ったように、修学先生の人生は、すべての人を自分と同じ境遇＝幸せにすること…それが進行形で叶えられていったのだと思いました。

人のことを常に考えられる人間になりたい

名古屋養育院　児童指導員　本田　華菜

今わたしが仕事をする上で一番大切にしていることが、「苦労を共にし、真心をもって導けば、必ず人の心を動かすことができる」という考えだ。臥竜山の農業指導で、修学先生が確信を得たものである。

修学先生は仕事をする際、必ず自分がやってみせ、それを少年たちに見せて教えていた。そして、少年たちは一緒に汗水流して働くうちに、しだいに心を開いていった。

今、私は子どもたちに対して、掃除や当番をお願いするにも、必ず自分が動いている姿を見せることを自分の中で決まり事にしている。〝あれやれ、これやれ〟と口に出す前に、姿で示そうと決めて仕事をしている。修学先生のエピソードに接して、私も先生のように、人の心を動かすまでにはとても到達できないと思うが、いつかは人の心を動かせると、あきらめずに姿で示していきたい。

修学先生の子どもに対する熱意、社会福祉事業に対する姿勢は本当に素晴らしいもので、見習いたいものだ。まだ現場に入って少ししか経っていないが、私は杉山辰子先生や鈴木修学先生のように、三徳である「慈悲」「至誠」「堪忍」を少しでも意識できているだろうかと、本を読んで考えた。人々の憂い・悲しみを自分のこととして受け止め、自らの喜びを他人に分け与える優しさの心。間違った行いや悪い心を退け、世のため人のために自らを役立て、優しさをたゆみなく持ち続ける心。はたして、腹を立てず、恨みや怒りを捨てさり、理不尽な出来事からも逃げ出さず、他人を許す広い心を持てるだろうか。

この仕事に就く前は、人のためになりたいと希望を持ち、福祉の現場で活躍することを夢見ていた。しかし、現場に出てみて、仕事を嫌いだと思うことはないが、自分の思うようにはいかないこと、意識しているだけでは変わらないことを実感している。自分の不甲斐なさなどを感じ、むなしくなってしまうことがある。そのたびに、周りを考える余裕がなくなり、自分のことしか考えられていないように思う。きっと、修学先生にもそんなこと

があったのだろうと思うが、常に「慈悲」「至誠」「堪忍」を心に持っていたから、人のことを考えた行動ができたのだろうと感じた。

特にそれを思ったのは、生の松原のハンセン病療養所の運営を任されていたときのエピソードだ。「博多どんたく」という祭りを見に行きたいという患者たちに、「あんたら、その恰好で行くつもりか」と言ってしまった。本当は、そんなことを言わないことがいいのかもしれないが、誰だって人間だ。つい口に出して人を傷つけてしまうことはある。修学先生は、自分の宝物を質屋でお金に換え、患者の思いを叶えた。

このように、人のことを考え、自分の対応に間違いはないかと常に気にしながら、子どもたちと向き合いたいと思っている。簡単にできることではないが、いつかは、その思いが体にしみついて、無意識でもできる人間になりたいと思っている。

いつか私も修学先生と同じような行動を…

名古屋養育院　保育士　久木田　寛久

私は「日本の福祉を築いたお坊さん」を読む前は、福祉とはどのようなものなのか正直わかりませんでした。読み終わった後も同じ思いでした。しかし「今の自分にも何かできることがあるのではないのか」と具体的に考えられるようになった気がします。

現在は児童養護施設で児童に対して養護するという仕事をしていますが、今後は視野を広げて児童分野以外でも活躍ができるようになれればと思っています。そのためには今できることを全力で行い、修学先生のようにたくさんの人に認められることが必要だと感じました。

私は、ハンセン病に関してたくさんのことを知っているわけではありません。しかし、たくさんの人が困っていることを知り、助けたい一心で活動を続けられた修学先生の行動力に驚きました。当時、病気への誤解から一般的には毛嫌いされていたハンセン病患者に対して、修学先生はそのような扱いはせず、患者の存在を受け止めていらっしゃいました。その思いは児童養護の分野においても大事なことであると思いました。

戦時中も、自分のことで精一杯であったはずなのに、戦火で苦しんでいた子どもを収容し、養護していくということは並大抵のことではなかったと思います。もし、仮に今誰かが同じことをしても、おそらく失敗するであろうと思います。当時の状況を考えれば考えるほど、修学先生だからこそできたことなのだと感じました。

修学先生の子どもの育て方で一番共感できたことは

「ほめて育てる」ことです。今の自分は業務を覚えることに必死になってしまい、子どもを十分にほめることができていないと思います。それを簡単に成し遂げてしまった修学先生にはとても驚かされました。

今の自分に足りないのは、子どもの良いところを見つけることだと思います。一年目だからと言って今のままでよいとは思えません。子どもの悪いところばかりに目を向けるのではなく、良いところを見つけて、そこを伸ばす育て方ができるようになりたいと思います。

修学先生自身の生き方は、とても自分のために生きているとは思えませんでした。すべてを他者に還元して生きていたのではないかと感じます。今の自分にはそのような思いはあっても行動に移すことができません。それを行動に移してしまった修学先生の生き方はとても尊敬できます。今は私も若く、自分の欲求もあるため、すべてを児童のためにという行動はできませんが、ゆくゆくは修学先生と同じような行動ができる人間になりたいと念願しています。

人々の本当の幸せを願い続けた偉大な方

名古屋養育院　児童指導員　壺井　ひろこ

私はこの本を読むときに、修学先生という方は一体どんな性格で、どのようなきっかけでこの福祉の道を選び、どのような人生を送られたのかをしっかり理解しようと思った。

まず性格についてだが、生まれながらに明るい性格と、誠実で勤勉な気質を兼ね備えていて、周りの人からの信頼も厚く、実直な青年だった。その修学先生が人生の意味を考え始めたときに、ある婦人と出会う。この婦人は、修学先生が生涯「師」と仰ぐことになる杉山辰子先生である。この杉山先生に教えていただいた法華経をもとに修学先生は、奥さまと共に自分たちの持ち物を売ってまでも、ハンセン病療養所の運営にたずさわるなど、困っている人のことを第一に考え、全力で支援してきたのである。

杉山先生は法華経の教えを「慈悲」、「至誠」、「堪忍」という三徳にまとめて諭しており、修学先生自身、辛く困難なことがあっても、その苦難は必ず次の人生につながるものだと考え、周りの助けも借りながらも乗り越えたと言われている。

昭和八年、子どもを虐待してはならないという法律ができた。「口減らし」のために売られてしまう子どももいたという。そんな子ども達のために、修学先生は育児院をつくり、養育にあたる。その中にあって修学先生は

職員に、どんな悪さをする子どもでもほめると必ず良い子になると教え、五つほめて一つ教えるという心構えを徹底して教えていったという。この「ほめて育てる」という指導法は、その後修学先生が手がける教育事業の指針ともなるのである。

修学先生は、育児院だけでなく、保育園や診療所を開設していく。また、「大荒行」という厳しい修行にも挑むのである。

さまざまな困難を乗り越えた修学先生は終戦後、日本にたくさんの孤児がいることを知る。この現状を何とかしたいと考え、法音寺の住職として、また昭徳会の理事長として福祉の第一線に立つ。そして、これからの日本には「科学的知識を持ち、社会福祉を担っていく人材の養成が必要」という考えに行きつき、この確信をもとに日本福祉大学を創設したのである。

修学先生は昭和三十六年に藍綬褒章を受章し、みつ夫人と共に天皇陛下に拝謁されている。宗教者として、社会事業家として、教育者として、人々の本当の幸せを願い続けた修学先生は本当に偉大な人だと思った。

児童養護施設　名古屋養育院

●愛知県名古屋市南区呼続4－26－37
●入所定員53名
●職員　正職員32名、パート職員9名

●児童指導員〈児童福祉分野〉＝児童福祉施設において、児童の生活指導を行う。次の任用資格が必要。①地方厚生局長の指定する児童福祉施設の職員を養成する学校その他の養成施設を卒業した者。②大学の学部で、心理学、教育学又は社会学を修め、学士と称することを得る者。③小学校、中学校、高等学校の教諭の資格を有する者。④高等学校を卒業した者であって、2年以上児童福祉事業に従事した者。⑤3年以上児童福祉事業に従事した者であって厚生労働大臣または都道府県知事が適当と認定した者。具体的な進路としては、4年制の福祉系大学を卒業するか、大学で、心理学、教育学、社会学を専攻し、児童指導員任用資格を取得することが一般的。

●保育士〈児童福祉分野〉＝児童福祉施設において児童の保育を行う者。保育士の資格が必要。

※本稿は平成27年10月に頂きました。（掲載順不同）
※諸岡ひとみさんは、平成28年4月1日付で、同じ昭徳会の児童養護施設「名古屋若松寮」に異動しました。

『日本の福祉を築いたお坊さん』・星野貞一郎著・中央法規出版・800円（税別）　本書の著者印税のすべては「あしながの育英会」に寄付されています。

つなぐ・つなげる・つながる

～子育て支援と里親支援の取組み～

名古屋養育院内・子ども家庭支援センターさくら

当センターでは地域支援として、①相談援助事業、②子育て支援事業（さくらあそび場、短時間託児など）、③地域交流事業、④里親支援事業の４つの事業を実施しています。地域住民のニーズに応えて支援内容を発展させてまいりましたが、この事業を支えているのは、地域の力です。イベントの企画運営は子育て中のママである「あそび場ママ」、さくらあそび場や短時間託児の見守りとして、福祉・心理に関心のある「大学生・中高生」、子育てが落ち着いた先輩ママ「ママボランティア」、高齢者の方などの地域住民、社会的養護の担い手である「里親」などの力を借りています。地域住民それぞれの持っている力を引き出し、支えていくことで、健全な子どもの育ちを支え、子ども虐待の予防の一助となることが当センターの役割となっています。職員だけでなく、地域の力を活用しているこ

とが、当センターの強みだと思っています。

乳・幼児期の子どもと親との関わりは、子どもの心身発達・成長にとって、とても重要です。核家族化が進む中、父親の育児参加が積極的になってはいますが、それでも母親の負担は軽減されず、子どもへの不適切な関わりにつながることもあります。また、親の成育歴や既往歴から、子どもへの虐待につながることもあります。

児童養護施設と同様、里親は、親の病気や離婚・虐待などさまざまな事情があって家族と暮らすことのできない子どもたちを、一時的に、もしくは長期間にわたって新しい家族として迎え、養育します。里親やファミリーホームは公的な養育ではありますが、私的な営みを軸とする家庭として、地域で生活をします。ただでさえ子育てが難しくなったと言われている時代、血のつながりのない子どもを家庭に受け入れて育てることが容易ではないことは想像がつくのではないでしょうか。

そうした子どもの養育には、チームとしてサポートする支援体制が必要であり、利用者もまた地域の支援者となり得ます。さらに、児童相談所など関係機関と連携しながら、児童家庭支援センターの持つ地域ネットワークや乳児院・児童養護施設など、本体施設やベースとなる活動の専門性を活かした養育支援、心理療法などの心理相談機能を活かすことで、支援体制の構築の促進に尽力していきたいものです。地域の力を活用し、地域住民を地域に「つなぐ・つなげる・つながる」をスローガンに、これからも支援を行っていこうと考えています。

子ども家庭支援センターさくら（名古屋養育院内）
里親支援専門相談員　**山口由美**
支援相談員　**大矢紘恵**

《七月の言葉＝大暑》

大暑とは、暑さが最も厳しくなるという意味です。厳しい暑さにより、夏の到来を強く感じます。農家にとっては田の草取り・害虫駆除など、大切な節目の時節です。またこの時期は暑さの中、体力の消耗が激しくなりやすいので、夏バテ防止のため睡眠・栄養などに注意しましょう。

《夏の花＝蓮》

蓮と睡蓮は混同されやすい植物です。蓮は水面より高く上がり咲き、睡蓮は水面近くで咲きます。巻頭の言葉（不染世間法　如蓮華在水＝世間の法に染まざること　蓮華の水に在るが如し）。花壇ではなく泥田にあって美しく咲く蓮は、世間の泥（煩悩）に決して汚されることのない、法華経を信仰する人の清浄な姿にたとえられます。

○7月はほうろく加持・虫封じ祈祷が、本山及び、東京・大阪・中国の各地区で厳修されます。

お子さんの虫封じ祈祷も併せて執り行われます。詳しくは、それぞれ所属の支院・布教所にお問い合わせいただき、是非、お出かけください。

編集後記

「御開山会」。大勢の方にお会いしました。お便りもいっぱいいただきました。一年に一度の大盛儀、本当に嬉しい三日間でした。

◎その方は100歳を超えたそうです。毎年毎年「来年はお参りできないかも」とおっしゃりながら、毎年来られているそうで、今年も来られました。お年がお年、補聴器をお使いですが、周囲の方によると〝きっと、ほとんど聞こえていない〟とのこと。法要の声明も、経典読誦も、唱題も、そして山首上人さまのお声もお耳に届いていないかもしれません。それでもいいのです、その方は。法音寺が大好きなのですから…。

◎その方は91歳。お1人では来られません。そこで支院から2人の方が付き添われました。本堂で法要中は椅子席で。そして食事は開山堂。椅子席は？と見回している3人の姿を見られた他支院の方が、サッと席を譲ってくださいました。そして〝お嫁さんですか？お孫さんですか？〟。〝イーエ〟と付き添われた方が答えたら、周りの方々がみんな、目をパチクリされたそうです。これが法音寺！

◎そのご夫婦は、ここ数年どちらかが体調を崩され、参詣できなかったそうです。今年は何とか、と考えていましたが〝支院団参では皆さんに迷惑がかかるし〟と、今年もあきらめようと話していたらお孫さんが〝ボクが車を出すから、じいちゃん、ばあちゃん、一緒に行こうよ〟と言ってくれて、嬉しくて嬉しくて…。ご夫婦と、娘さんご夫婦と、お孫さんご夫婦と、そして曽孫さんと、7人で来られました。爽やかなお孫さんの笑顔がとても素敵でした。

◎その方はただ今「闘病中」。妙齢なご婦人なのにまるで一休さんのようになった頭に頭巾をかぶせ（失礼！）ご主人とお2人で。やはり団参バスでは皆さまに迷惑と新幹線で。下世話な話、随分費用がかかりましょうに。でも、本山に一歩足を踏み入れて、山首上人さまにお会いできたら、如何なる病もたちどころに…と。

こんな嬉しいお話……不老長久の良薬です。

ひまわり #43

じいちゃんの命日

竹中 淳

じゃあな
ああ
おじいさん明日はあなたの命日ですね
でも今年はまだのようだね
ただいま
ああおかえり
知らない間に大きくなったもんだね
？
おまえも大きくなったけど…この木だよ
木？この木が？
このクスノキはねおまえと同じ歳なんだよ

おまえが生まれた年にこの木も芽を出したんだ

おじいさんこんな所にホラ　芽が

ほ～風に吹かれて種が飛んできたんだな

孫のおまえと同じようにかわいがって大事に育てたんだ

葉や枝がのびてきたある年の夏にチョウがはじめてやってきてね

ばあさんこんな所にチョウが卵を産みつけていったぞ

それから毎年そのチョウはやって来るようになって

蓮　ホラチョウチョだ今年もよう来た！よう来た！

じいちゃんは
おまえとこの木が
元気に育つことと
夏にチョウが来るのを
そりゃあ
楽しみにしてたんだよ

おまえが五歳の
時にじいちゃんが
亡くなって…
あの年に見たチョウが
最後だった

へー
そんなに
楽しみにして
たのかぁ

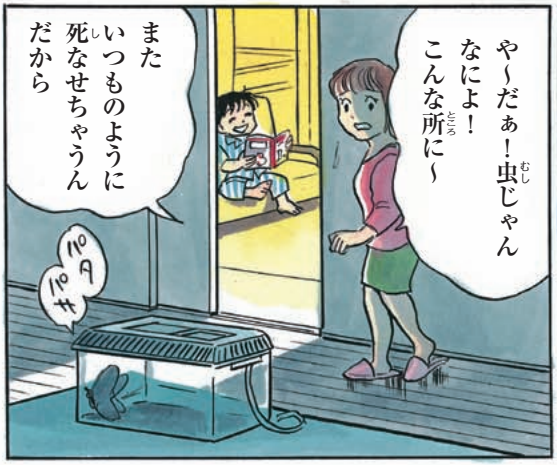
ボクも
そのチョウ
見てみたいな

じいちゃんが
亡くなってからも
命日が近づくと
毎年そのチョウは
やって来て　卵を
産みつけてくんだ

今年は
どうしたのかしら
もう来ても
いい頃だけどねぇ

ねえ
メイニチって
なに？

亡くなった日だよ
明日がじいちゃんの
命日さ

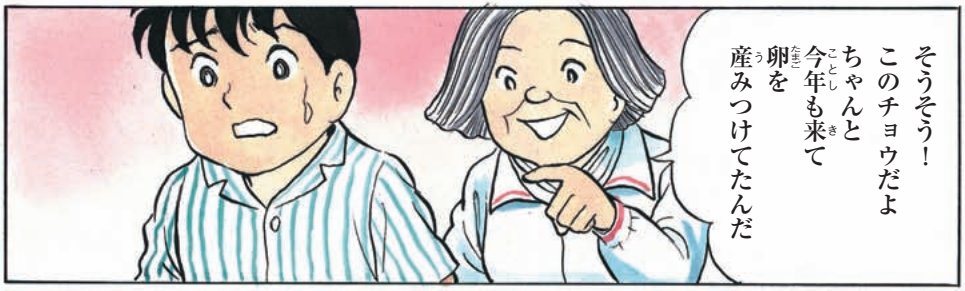


や～だぁ！虫じゃん
なによ！
こんな所に～

また
いつものように
死なせちゃうん
だから

蓮！
蓮！起きなよ
なに～こんな時間に～
昼間　まったく気づかなかったけどこんな所にサナギがいたんだよ　ホラ！
あ！羽化する…
えっうそぉ～

こ　このチョウきのうの…


そうそう！このチョウだよちゃんと今年も来て卵を産みつけてたんだ

きのう捕まえたチョウも卵を産みにきっとここへ来たんだ

よかったねぇおじいさん

蓮？どうしたんだい？
ダダッ

ドドドドッ
虫カゴ！あれ～どこだ？
何よこんなに朝早くからうるさいわね！
ダダダ
ダダダ
ハァ
ハァ
ガラガラッ
ビシャ
ごごめんよこんなせまい所にとじ込めて

おしまい

法音寺の社会福祉・教育事業

徳を昭（あき）らかにし、徳を以って世間を照らす

社会福祉法人 昭　徳　会

■児童養護施設
駒方寮
名古屋養育院
名古屋若松寮

■障害児入所施設
小原学園

■障害者支援施設
小原寮
泰山寮

■特別養護老人ホーム
安立荘
高浜安立荘
小原安立

■障害福祉サービス事業
授産所高浜安立

■軽費老人ホーム（特定施設入居者生活介護事業）
ケアハウス高浜安立

■軽費老人ホーム
ケアハウス大阪安立

■養護老人ホーム
養護老人ホーム高浜安立

■自立援助ホーム
慈泉寮

■保育所
駒方保育園
光徳保育園
天王保育園

法人本部　〒466-0832 愛知県名古屋市昭和区駒方町4-10　TEL（052）831-5171
http://www.syoutokukai.or.jp

我が如く等しくして異なること無からしめんと欲す

学校法人 日本福祉大学

■日本福祉大学大学院　■日本福祉大学
■日本福祉大学中央福祉専門学校　■日本福祉大学付属高等学校

法人本部　〒470-3295 愛知県知多郡美浜町奥田会下前35-6　TEL（0569）87-2211
http://www.n-fukushi.ac.jp

法音・平成28年7月号・No.561・平成28年7月1日発行
発行所・日蓮宗法音寺／制作・法音寺広報委員会
非売品／印刷・（株）一誠社

自説誓言

一人を導く功徳は広大です
是非一人は導きましょう

写真・法音寺大本堂
《山首上人の大荒行御成満奉告法要の砌》

日蓮宗大乗山 法音寺

〒466-0832 名古屋市昭和区駒方町3-3 TEL.052-831-7135
http://www.houonji.com FAX.052-831-9801

講話日
毎月7日・17日・27日
午後1時30分

支院名	住所	TEL	毎月の講話日
大乗山泰明寺	名古屋市中村区名駅2-37-3	〒450-0002 ☎〈052〉581-2069	5・20日
開基堂	江南市寄木町天道18	〒483-8184 ☎〈0587〉53-5436	10日
東京支院	東京都練馬区谷原2-6-37	〒177-0032 ☎〈03〉3904-1251	第1日曜日。15日。第4土曜日
山形布教所	山形市長町2-4-6	〒990-0811 ☎〈023〉681-0770	10日
静岡支院	磐田市城之崎4-7-3	〒438-0084 ☎〈0538〉32-6625	2・12・22日
豊川支院	豊川市中野川町1-26-3	〒442-0885 ☎〈0533〉86-4704	4・20日
安城支院	安城市新田町小山31-25	〒446-0061 ☎〈0566〉76-2504	第1、又は、第2日曜日。18・28日
明川支院	豊田市明川町堂ノ脇1-2	〒444-2601 ☎〈0565〉67-2231	11日。第4土曜日
佐屋支院	愛西市大井町浦田面296	〒496-0921 ☎〈0567〉32-1825	4日。第2日曜日。24日
一宮支院	一宮市大江1-7-4	〒491-0851 ☎〈0586〉72-7208	5・15・25日
西春支院	北名古屋市九之坪東ノ川20	〒481-0041 ☎〈0568〉22-5813	2・12・22日
岐阜支院	岐阜市切通7-15-22	〒500-8237 ☎〈058〉245-2939	4・14・24日
笠松布教所	岐阜県羽島郡笠松町八幡町23	〒501-6042 ☎〈058〉388-2740	12日
大垣支院	大垣市宝和町5	〒503-0972 ☎〈0584〉78-4854	1・11・21日
関支院	関市西福野町2-15-11	〒501-3244 ☎〈0575〉22-0776	3・13・23日
平賀支院	関市市平賀213-2	〒501-3822 ☎〈0575〉23-3771	5・15・25日
郡上八幡支院	郡上市八幡町小野721-3	〒501-4221 ☎〈0575〉65-3933	8・22日
四日市支院	四日市市赤堀2-4-7	〒510-0826 ☎〈059〉352-3633	3・13・22日
上野支院	伊賀市上野向島町3475	〒518-0875 ☎〈0595〉21-0127	1・11・21日
京都支院	京都市上京区寺町通今出川上ル二筋目西入北横町360	〒602-0818 ☎〈075〉231-3437	1・9・20日
高槻支院	高槻市天神町1-9-2	〒569-1117 ☎〈072〉685-1003	第1日曜日。11・21日
大阪支院	大阪市此花区西九条3-4-41	〒554-0012 ☎〈06〉6465-5051	第2日曜日。23日
福井布教所	あわら市春宮3-28-2	〒919-0632 ☎〈0776〉73-5234	第3土曜日
和泉支院	大阪府泉南郡田尻町嘉祥寺404	〒598-0091 ☎〈0724〉66-3112	第1日曜日。14・22日
神戸支院	神戸市兵庫区五宮19-17	〒652-0007 ☎〈078〉360-4884	第2土曜日。21日
淡路支院	南あわじ市神代国衙910	〒656-0455 ☎〈0799〉42-0175	5・15・25日
岡山支院	岡山市南区若葉町1-16	〒702-8047 ☎〈086〉262-0818	第1日曜日。7・23日
高知布教所	高知市上町5-5-39	〒780-0901 ☎〈088〉823-1983	12日
福山支院	福山市西町3-19-5	〒720-0067 ☎〈084〉921-3078	1日。第3日曜日
三原支院	三原市古浜3-3-17	〒723-0013 ☎〈0848〉62-5087	第2土曜日。第4日曜日
安芸津支院	東広島市安芸津町三津3765-3	〒739-2402 ☎〈0846〉45-4012	第1土曜日。第4日曜日
坂支院	広島県安芸郡坂町坂東2-24-12	〒731-4313 ☎〈082〉885-1064	第1、又は、第2日曜日
福岡支院	福岡市早良区城西2-11-37	〒814-0003 ☎〈092〉821-7975	第1日曜日。第3日曜日。15日
壱岐布教所	壱岐市石田町池田東触1112	〒811-5221 ☎〈0920〉44-5445	13・23日
筑後布教所	筑後市大字西牟田5954-1	〒833-0053 ☎〈0942〉53-7273	第2日曜日。第4日曜日
天草布教所	上天草市大矢野町維和1502-1	〒869-3604 ☎〈0964〉58-0742	1日
田川支院	田川市春日町7-30	〒826-0026 ☎〈0947〉42-1819	第2日曜日。第4日曜日
名古屋地区	名古屋市昭和区駒方町3-3	〒466-0832 ☎〈052〉831-7135	7・17・27日
養老布教所	岐阜県養老郡養老町高田653-6	〒503-1314 ☎〈0584〉32-3589	6日
瀬戸布教所	瀬戸市東本町2-20	〒489-0816 ☎〈0561〉85-6860	9・19・29日
亀岡布教所	亀岡市篠町篠牧田73-1	〒621-0826 ☎〈0771〉25-7807	第2月曜日。第4日曜日

※やむを得ない理由で講話日を変更する場合があります。開始時刻及びその他の行事については、それぞれにお問い合わせください。